

鞠智城跡第 33・34 次発掘調査概要

令和元年（2019年）7月21日（日）

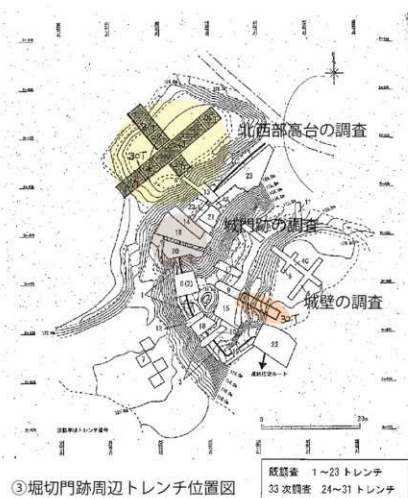
1 堀切門跡の構造

（調査前にわかっていたこと）

- 城域の南中央に位置し、阿蘇溶結凝灰岩の崖地の南西部を掘り切って通路を通して。
⇨石壁や土塁を築き谷をせばめて造る深迫門や池の尾門等と異なるは造り方
- 通路は路面幅 1.8~2.7m, 路面は粘質土で整形。下位に桁形にクランクする形状。
- 通路上方傾斜変換点に門の支柱の柱穴を検出。門扉（唐居敷；からいじき）の位置が特定できる。
* 門前面に比高差 1.2m がある懸門（けんもん）構造。
- 城壁の東側高さ約 12.8m。裾部から約 5m 上部にテラス部を設けた 2 段構造。上部は、地山削り出し、下段を版築盛土により整形していると推定



① 堀切門跡周辺地図



③ 堀切門跡周辺トレンチ位置図

既調査 1~23 トレンチ
33 次調査 24~31 トレンチ

2 堀切門跡の調査 (16・20 トレンチ)

わかっていること

- 石（花コウ岩）で作られた唐居敷（からいじき；門扉を支える土台）
→扉を動かすための軸摺穴（じくずりあな）の間の距離が約 2.8m。（約 9 尺）
（最大道路の幅に近い。）



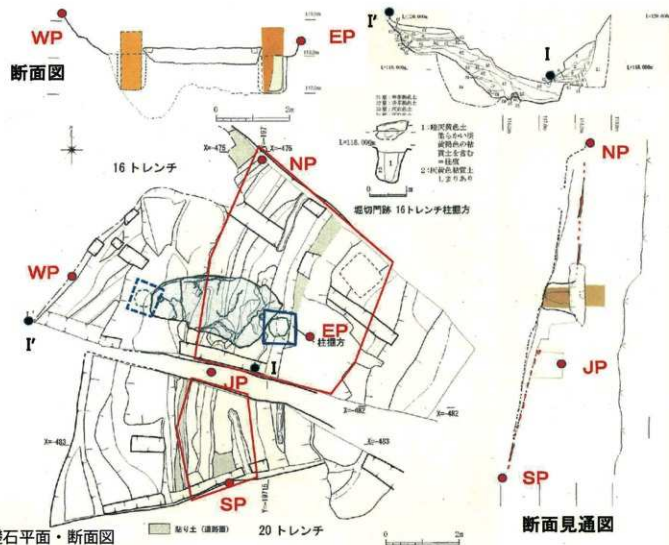
② 唐居敷実測図

- 道路脇に柱穴を 1 基検出。（④図面参照）

*懸門（けんもん）構造

通路部分と門の高さが約 1.2m の高低差がある。
普段は階段やはしこ等をかけて、戦い等の時はそれらを外して守りをかためる構造。
福岡県大野城北石垣門（約 1.4m の高低差）や鬼ノ城城門（岡山県）約 2m の高低差）や屋嶋城「城門（香川県高松市）でも例がある。

朝鮮半島古代山城に類例がある。



④ 堀切門礎石平面・断面図

20 トレンチ

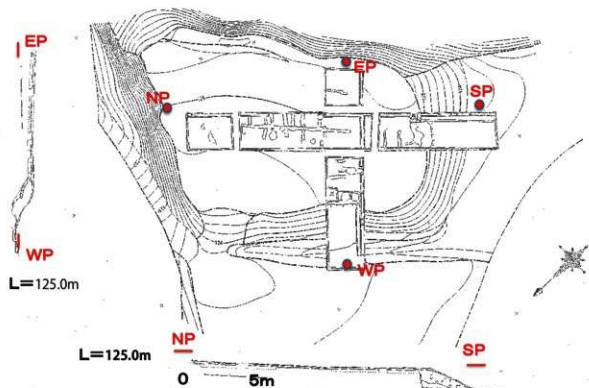
断面見通図

3 北西部の高台の調査

- (1) 南東側が約1間(約1.8m)高かった。→現況でも高台の東側がやや高い。
→高台にさらに土塁状の高まりがあった可能性がある。
- (2) 当時の遺構
当時の建物等の痕跡は見られず、耕作溝あり。
→昭和40年代クヌギ林を桑畑に改変するために重機で押しして整地したとの聞き取りあり。
- (3) 南側は高台を広げた痕跡
南側には3m以上上げた痕跡あり。上の部分は、大きなブロックを含む土で凹凸を埋めるような土の入れ方。中位には、黄褐色の粘質土とやや砂質の土を互層に積んだ状況が見られ、炭等を含む。下位は、粘土ブロックとやや砂質の土が互層に積まれている。幅東に15~20cm傾斜する。

当初の尾根筋が西側に入り込んでいた可能性や樹木による攪乱を埋めている可能性がある。
→高台の南側は削平され、表土直下でローム層(黄褐色粘質土)が見られる。
→中位・下位の積土が古いとすれば、城壁を構築する時に使用する粘質土の供給源として、切土・掘削された後、南西方向に平坦面を広げるために造成されたと考えられる。

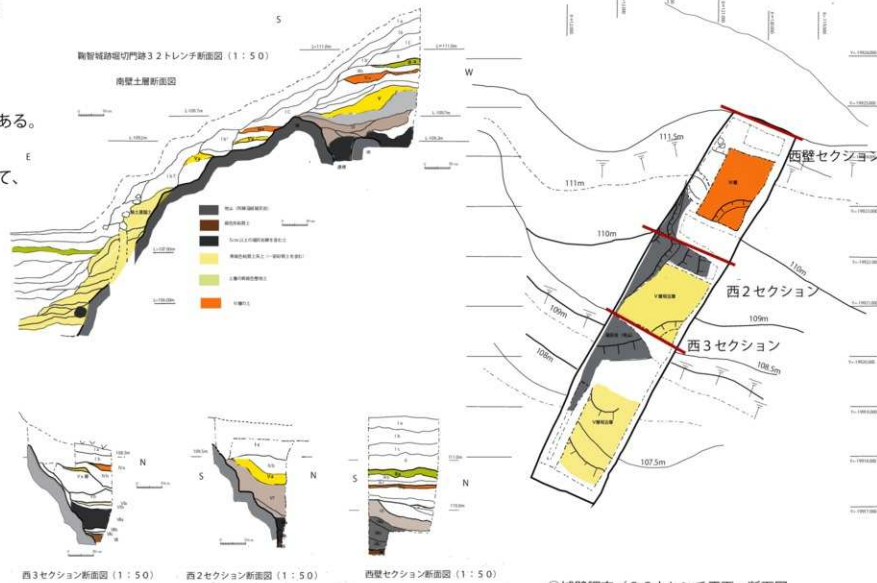
堀 門北西側高台調査:平面図・断面図



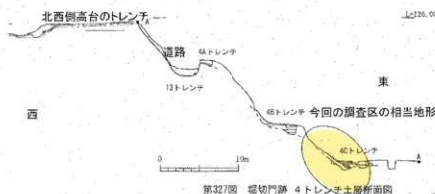
4 南東部の城壁の調査

城壁から見て南東側の城壁の構造の一部が解明

- ・大きく分けて3種類。3工程の互層積土を検出。
- ①32トレンチの下部では、基礎盛土というべき互層積土(やや砂質土と粘質土の黄褐色土を検出。
- ②その上層は凝灰岩の10~15cmの塊を含む土をベースに黄褐色粘質土を途中で張り、強度をもたせている。
- ③さらに上層は凝灰岩の砕かれた土に黄色の粘質土を張る互層積土。
*高松市屋嶋城の一部の土塁の積土に類似。
互層積であるが、必ずしも水平の積土ではなく、傾斜がある積土であることも特徴。



⑥城壁調査(32トレンチ平面・断面図)



⑦高台〜城門跡付近〜城壁(4トレンチ他)調査断面図